

“まとめ”を表す接続表現と後文脈の制約

三 好 伸 芳

1. はじめに

接続詞を典型とする接続表現は、日本語学分野において多くの先行研究があるほか、文章表現法を扱った国語教育のテキストでも独立した項目として解説があるなど¹、研究と実践の両面において有意義な課題であると言える。本研究では、「このように」に代表されるような、従来“まとめ”を表すとされてきた接続表現²について、後続する文脈の意味的な性質との関連から分析を行う。接続表現の中でも“まとめ”を導くとされる接続表現を扱うのは、具体例の総括や抽象化といった内容と強く結びついている点で文章表現上重要な接続表現であり、実践的な文章表現の課題においても扱いやすい項目であると考えられるからである。

以下では、まず「このように」に関する先行研究を検討したうえで、従来の一般化では記述的な問題があるほか、作文指導等においても困難が生じる可能性があることを確認する。続いて、当該接続表現に関し、作文指導等に应用可能な形で本稿なりの記述的一般化を示し、具体的な指導方法の提案を試みる。

2. 先行研究

接続表現を幅広く扱った研究として、日本語記述文法研究会（編）（2009）が挙げられる。その中でも、「このように」や「以上のように」などの“まとめ”を表す接続表現については、以下のように記述されている。

¹ 管見に限っても、例えば安部・福嶋・橋本（2010）、樋口（2016）、佐渡島・坂本・大野（2016）、野矢（2017）などが挙げられる。

² なお、「捜査関係者はこのように説明している」のような、副詞的に用いられる「このように」については、ここでは扱わない。

- (1) a. まとめの接続表現は、それまで述べてきた談話の内容を一括し、後続部でその内容を凝縮して提示することを示す。

(日本語記述文法研究会(編) 2009: 130)

- b. 後続部には、長い1文や複数の文、ときには複数の段落にまたがるような大きなまとまりが用いられることが多い。(同 2009: 131)
- c. 「このように」は、それまでの内容をまとめて提示するものとしてはもっとも一般的なものである。(同 2009: 131)
- (2) 私は6人きょうだいの下から2番目で、服も靴も自転車も兄や姉のお下がりがりばかりだった。私の友人は4人きょうだいの末っ子で、高校生になってもまだ1人部屋がもらえないとこぼしている。このように、きょうだいが多くと損なことが多い。(同 2009: 131)

以上のような基本的な特徴のほか³、「このように」を「要するに」との比較で論じた俵山(2007)では、「このように」の後文脈の特徴について、さらに踏み込んだ指摘がなされている。

- (3) (前略) 後件において、先行文脈では触れられていない新規の情報を導入している場合、「このように」の使用は不自然となる。
- (4) 病院などで製品の異常が見つかったと担当者が駆けつける。昔は、謝って代替品を渡すことで済ませたが、法改正などで1994年4月から不良品の回収が事実上義務づけられた。さらに昨春、厚生省は都道府県に「回収報告は原則として公表させよ」との通達を出した。その趣旨が企業に浸透してきた昨秋から、回収件数が急増した。|ようするに/??このように|、【これまでは回収しなかったり、こっそり回収していたことが、テレビや新聞、業界誌などを通じて表に出るようになった】。

(以上、俵山 2007: 212)

俵山(2007)によれば、「このように」は後文脈において「新規の情報」を導入することが出来ず、「再提示」(俵山 2007: 219)の機能を持つとされる⁴。俵山(2007)の分析は「このように」の後文脈を持つ意味的性質について言及

³ 石黒(2008: 146, 2016: 118)にも、ほぼ同趣旨の指摘がある。

⁴ 俵山(2007)には、この他にも「このように」や類似表現に関する非常に興味深い指摘があるが、ここでは本研究に関わるものだけを取り上げる。

している点で重要であり、この問題意識は本稿においても引き継いでいくことになる。

しかし、先行研究の記述では、次のような後文脈の容認性の差異を十分に説明することができず、記述的妥当性に関して問題が残るだけでなく、教授現場においても誤解が生じる可能性がある。

- (5) 「国語」という言葉には、学校教育における教科としての「国語」を除くと、少なくとも次の2つの意味がある。一つは、「日本人の自国の言葉としての言語」という意味である。この場合、「国語」とは実質的に「日本語」を指している。もう一つは、「ある国家で使用されている言語」という意味である。この場合、ほとんどの国家において、複数の異なる言語が「国語」と見なされることになる。
- a. {このように／以上のように}、「国語」という言葉は、国家という政治的な単位と密接に関わる言葉である。
- b. {#このように／# 以上のように}、「国語」という言葉を使用する際には、その意味用法に注意を払う必要がある。

(5ab) は、いずれも何らかの意味で前文脈に対する“まとめ”であると言える⁵。少なくとも、実際的な指導のレベルで、上記の例の後文脈を“まとめ”ではないと説明することは、極めて困難であると考えられる。しかし、(5a) が特に問題のない文連鎖であるのに対し、(5b) は不自然な文連鎖となっている。すなわち、日本語記述文法研究会（編）（2009）などのように、“まとめ”という用語のもとで接続表現「このように」の用法を説明すると、作文指導の際に混乱が生じる可能性があるということになる。

また、(5ab) の対立は、俵山（2007）の分析においても問題となる。上記の例のうち、(5a) では「国家という政治的な単位と密接に関わる言葉」という「新規の情報」がもたらされているにもかかわらず、それほど不自然ではない。仮にこれを「新規の情報」ではないと見なしたとしても、(5b) は (5a) に比べて明らかに不自然であり、いずれにせよ (5ab) の差異の説明は困難である。

⁵ (5b) は、筆者が大学の授業において作文の指導をする中で、実際に学生が書いた文章を参考に作成したものである。従って、このような例は従来の記述的一般化で捉えられないというだけでなく、実際の教授現場における問題意識に沿ったものでもあると言える。

以上の例は、「まとめ」や「新規の情報」というだけでは「このように」の記述として不十分であり、実際の作文指導を行う際にも十分な説明ができない可能性があることを示している。以下、本稿では、接続表現の前部に現れる文または文章を〈前文脈〉(= (5)の「このように」より前に相当する箇所)、接続表現の直後に現れる文を〈後文脈〉(= (5)の「このように」より後に相当する箇所)と呼び⁶、「このように」および関連する接続表現の後文脈に見られる制約を観察することで、より妥当な記述の一般化と指導方法を提案していく。

3. 「このように」の後文脈の特徴

3.1 記述的観察

本節では、「このように」⁷の後文脈に見られる意味的な特徴を分析していく。「このように」の後文脈に見られる制約は、(5ab)のような対比のみを観察すると、「～する必要がある」のような当為判断を表すモダリティと「このように」との共起制限のようにも見えるが、以下のように前文脈によっては十分容認される。

- (6) 「国語」という言葉には、学校教育における教科としての「国語」のほか、「日本人の自国の言葉としての言語 (= 日本語)」と「ある国家で使用されている言語」という意味がある。それぞれ全く異なる用法であるため、自らがどのような意味で「国語」という言葉を使用しているのか自覚的にならなければ思わぬ誤解が生じかねない。

{このように／以上のように}、「国語」という言葉を使用する際には、その意味用法に注意を払う必要がある。

では、(5ab)に見られる差異はどのように説明されるのだろうか。ここで注目したいのが、俵山(2007)において、「このように」と同じく“まとめ”を表す接続表現として挙げられている「このことから」⁸である。(5)の接続表

⁶ 実際の文章においては、必ずしもどこからが〈前文脈〉で、どこまでが〈後文脈〉であるかの判別がつかない場合もあるが、ここでは特に問題としない。

⁷ 以下、「このように」と「以上のように」は基本的に同じ性質を持つものとして扱い、「このように」という接続表現でこれらを代表させることとする。

⁸ 「このように」の場合と同様、接続表現「このことから」で「このことから／以

(18)

現を「このことから」に置き換えた以下の例は、「このように」と対照的な容認性を示している点で興味深い。

- (7) 「国語」という言葉には、学校教育における教科としての「国語」を除くと、少なくとも次の2つの意味がある。一つは、「日本人の自国の言葉としての言語」という意味である。この場合、「国語」とは実質的に「日本語」を指している。もう一つは、「ある国家で使用されている言語」という意味である。この場合、ほとんどの国家において、複数の異なる言語が「国語」と見なされることになる。
- a. {# このことから / # 以上のことから}、「国語」という言葉は、国家という政治的な単位と密接に関わる言葉である。
- b. {このことから / 以上のことから}、「国語」という言葉を使用する際には、その意味用法に注意を払う必要がある。

(7b) が問題のない文連鎖になっているのに対し、(7a) のような例は不自然である。以上のような「このことから」の振る舞いは、「このように」と対照的であり、これらの形式の比較によってより鮮明に「このように」の特徴を確認することができると考えられる。

ここで、「このように」と「このことから」で許容される後文脈について、それぞれ詳しく検討したい。(5ab) および (7ab) の差異に目を向けると、「このように」が容認される環境は、前文脈を具体的事例とした事実の抽象化ないし別側面であると捉えられるのに対し、「このことから」が容認される環境は、前文脈に基づく書き手の推論を伴っている点で異なっている。

- (8) a. (5a) および (7a) の文連鎖

「国語」という言葉には、少なくとも「日本人の自国の言葉としての言語」と「ある国家で使用されている言葉」という2つの意味がある。

↓

「国語」という言葉は、国家という政治的な単位と密接に関わっている。

- b. (5b) および (7b) の文連鎖

「国語」という言葉には、少なくとも「日本人の自国の言葉としての言語」と「ある国家で使用されている言葉」という2つの意味がある。

上のことから」を代表させる。



「国語」という言葉の使用する際は、注意を払う必要がある。

(8a) の後文脈は、前文脈からいわば帰納的に導かれる内容であると言える。一方、(8b) において、後文脈は前文脈から必ずしも論理的に導かれる内容ではなく、むしろ前文脈に対する書き手の評価やそこから推論される判断に相当するものである⁹。

以上のような分析に基づけば、(6) のような前文脈の場合に「このように」が許容されるという事実も容易に説明することが出来る。

(9) (6) の文連鎖

「国語」という言葉には、全く異なる2つの意味があるため、自覚的に使用しなければ誤解が生じかねない。



「国語」という言葉の使用する際は、注意を払う必要がある。

(6) の場合には、既に前文脈で「国語」という言葉を使用する際に誤解が生じるリスクについて言及がある。そこから後文脈のような主張を帰納的に導くことは容易であり、「このように」の使用が可能になっているのだと考えられる¹⁰。

また、(7a) の後文脈に「～と言える／～と考えられる」などを付加した場合に容認度が上がるという事実も、上述のような分析の傍証になると考えられる。

⁹ 俵山 (2007: 220) においては、「このように」は「再提示」を表し、「このことから」が「書き手の判断提示」を表すというごく簡単な言及がなされており、本稿の主張とも通じるところがある。しかし、「このことから」の具体例については特に触れられておらず、「書き手の判断」がどのような内実を持つものなのか判然としない。本稿では、「このことから」の後文脈に現れる「判断」について、「前文脈に基づく書き手の推論を伴うもの」とし、次節で示すコーパスによる調査からもこの点が裏付けられると考える。

¹⁰ この点で、俵山 (2007) の「再提示」という概念は重要である。ただし、俵山 (2007) は「再提示」を「ある情報を、先行文脈で提示された別の情報との意味的同一性が保障できる形で読み手に提示すること」(俵山 2007: n219) と述べているが、(5a) のように後文脈が明らかに前文脈を抽象化しているような場合であっても「このように」を使用することは可能であり、「意味的同一性」という捉え方はやや強すぎるように思われる。

- (10) 「国語」という言葉には、学校教育における教科としての「国語」を除くと、少なくとも次の2つの意味がある。一つは、「日本人の自国の言葉としての言語」という意味である。この場合、「国語」とは実質的に「日本語」を指している。もう一つは、「ある国家で使用されている言語」という意味である。この場合、ほとんどの国家において、複数の異なる言語が「国語」と見なされることになる。

{このことから／以上のことから}、「国語」という言葉は、国家という政治的な単位と密接に関わる言葉である {と言える／と考えられる}。

(7a) の後文脈に「～と言える／～と考えられる」という話者の推論であることを明示する表現を補った(10)では、「このことから」の使用が問題なく許容される。このような事実も、「このことから」の後文脈は、書き手の推論を伴っていないからではないとする本稿の主張と整合的である。

以上のような観察を踏まえ、本稿では、「このように」と「このことから」の後文脈に対する意味的な制約を次のように分析する。

- (11) a. 「このように」の後文脈に対する意味的制約

「このように」は、前文脈を根拠とした書き手の判断を導くことができず、後文脈には帰納的な抽象化を行った内容が現れる。

- b. 「このことから」の後文脈に対する意味的制約

「このことから」は、前文脈の帰納的な抽象化を導くことができず、後文脈には書き手（話し手）の推論を伴った判断が現れる。

このような記述は、「このように」が「新規の情報を導入できない」という先行研究の指摘の部分的修正を促すものである。次節では、(11) の分析がコーパス調査によっても裏付けられることを確認する。

3.2 コーパスを用いた調査

(11) の記述に基づけば、「このように」が使用される文と「このことから」が使用される文では、後文脈の述語に語彙的な傾向差が生じることが予測される。すなわち、(11b) のような制約を持つ「このことから」の場合には、後文脈の主節に思考や判断を表す述語がより多く出現すると考えられるのである。そこで本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWC)』を用い

て実例データを収集した¹¹。検索例のうち上位 100 例に現れた述語をまとめたのが、以下の表である¹²。

表 1 「このように」と共起する述語¹³ (100 例中)¹⁴

なる	7	活用する	1	主だ	1
する	3	関係づける	1	焼失する	1
多い	2	完成する	1	生じる	1
行う	2	簡単だ	1	進展する	1
考える	2	強調する	1	神道的だ	1
存在する	2	区別する	1	推進する	1
顕やかに驚異の存在だ	1	苦しむ	1	増加する	1
ある	1	研究する	1	その意味での財産的価値ある営業に固有の事実関係だ	1
行く	1	構成する	1	対照的だ	1
意識する	1	合法化する	1	出す	1
いっそう激しいものだ	1	功を奏する	1	保つ	1
入れる	1	心得る	1	頼る	1
生まれる	1	心もとない同盟国だ	1	違う	1
描きそこなう	1	誇張する	1	著名だ	1
描く	1	異なる	1	付く	1
選び取る	1	好ましい	1	綴る	1
起きる	1	さまざまな要素からなる複合体だ	1	低調だ	1
降りる	1	左右する	1	できる	1
重ね合わせる	1	支配する	1		
語る	1				

¹¹ Web アプリケーション「中納言」(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』通常版、ver.2.4)を用いて用例を収集した。なお、「このように」の検索の際は、以下のような指定を行った。

キー：此の(語彙素)

後方共起 1 (キーから 1 語)：様(語彙素)

後方共起 2 (キーから 2 語)：に(書字出現形)

後方共起 3 (キーから 3 語)：(品詞の中分類が記号 - 読点)

「このことから」の場合、上記の「様」「に」を「事」「から」に置き換えたものになる。なお、これらの指定は「このように」「このことから」の全用例の抽出を意図したものではない。

¹² 悉皆的な調査でないという点では不備が残るが、本稿のような調査でも大まかな傾向を捉えることは可能であると考ええる。

¹³ ここで「共起する述語」に該当するのは主に主節述語であるが、主節述語が「このように／このことから」のスコップから外れていると考えられる場合には、スコップ内の述語を掲出している。

¹⁴ 以下の表では「～(ら)れる」、「～ことができる」などの助動詞相当の表現は考慮していない。また、形容動詞述語、名詞述語はすべて「～だ」に統一したほか、異なる文字表記も統一して示している。

展開する	1	抜ける	1	見る	1
伝達する	1	暴露する	1	結びつく	1
到達する	1	反応する	1	もたらす	1
「どちらか一方に寄せて」 「形をつくる」ことだ	1	販売革新にも力を注いだ 時代の先覚者だ	1	用いる	1
とる	1	開く	1	持つ	1
ない	1	降る	1	物語る	1
二次オンをはるかに越える 巨大システムだ	1	触れる	1	要因の一つだ	1
日常生活における人間の 造形感情の持ち方だ	1	変貌する	1	読む	1
担う	1	増す	1	割に合う	1
		マッハに反対するものだ	1	必要とする	1
		見向く	1	融合してできたものだ	1

表2 「このことから」と共起する述語 (100例中)

考える	18	言う	1	進める	1
分かる	12	いる	1	説明する	1
なる	10	浮かび上がる	1	想像する	1
言える	6	移る	1	確かめる	1
ある	2	得る	1	付ける	1
設定する	2	推し量る	1	成り立つ	1
求める	2	変える	1	廃止する	1
呼ぶ	2	確信する	1	図る	1
意味する	2	確認する	1	必要だ	1
窺う	2	崩れる	1	導く	1
思う	2	形成する	1	認める	1
示す	2	作成する	1	見る	1
取り去る	2	生じる	1	予想する	1
想定する	2	使用する	1	予測する	1
与える	1	心配する	1	読み取る	1
表わす	1	推測する	1	類推する	1

表1が「このように」と共起した述語、表2が「このことから」と共起した述語の例である。一見して分かるのは、「このように」の後文脈に現れる述語が極めて多彩な様相を見せ、一定の傾向が認められないのに対し¹⁵、「このことから」と共起する述語は、「考える」、「分かる」、「言える」など、明らかに書き手の推論や判断を伴うと考えられるものが多いという点である。今回の調査で1例しか現れなかった語であっても、「表す」、「推し量る」、「確信する」、「推測する」など、思考や判断に関わるものが特徴的に現れているという点も重要

¹⁵ 「なる」や「する」などの語は相対的に多く用いられているが、これらの形式的な述語は言語環境を問わず頻出すると考えられるため、「このように」と共起する述語の特徴とは言えないだろう。

である。以下、一部の例を挙げる。まずは、「このように」の用例から見ていく。

- (12) a. 文章の基本的単位は、文 (sentence) ではなく、むしろ段落 (paragraph) である。段落は1つのまとまりのある考えを表わすものであり、その中で文はそれぞれ緊密に結びついて1つの統一体を形づくる。伝えるべきことが3つあれば、当然3つの段落が必要となる。順序についても慎重に配慮すべきで、たとえばお祝いとか御礼のことは最初にくるし、依頼は最後に置いたほうが、相手に与える印象が強い。エッセイを書く場合と違って、最初の主題へ戻るといような配慮はいらぬ。このように、手紙はたとえ私的書簡であっても、首尾一貫性をもつべきで、話題が脈絡もなくあちこちへ飛ぶのは好ましくない。

(LBc8_00002)

- b. J・A・ブロクソンは、いろいろな職業についている人たちが被験者にして訓練を行なった。時間を制限して、その中でできるだけたくさん読ませることと、速読術の講義・討議・家庭読書など系統的な速読練習が指導され、これを四十分ずつ八週間にわたって行なった。この結果、読書速度は二十%から四十一・七%に、理解度は五十二%から六十六%にそれぞれアップした。L・E・ウィークスは、四十五人の農業大学生を被験者にして、N・ルイス著『よりよくより速い読み方』という本（アメリカではこうした本がたくさん出ている）を使って速読の訓練をした。訓練のための文章を読んだあと、評価として一分間の読語数と理解度が調べられるようになっている。このように、本を速く読む訓練を受けたものは、読書速度も理解度もともに増加したということである。

(LBc0_00003)

- c. 近世封建社会は身分制によって形成されている。しかし、民衆に接する代官所の構成は、農民・町人身分から任ぜられた手代と、武士身分である御家人から任ぜられた手付が同じ役所で業務に従事している。さらに宝暦・明和期以降になると、江戸前期の大庄屋や割元と類似して、有力な名主・庄屋クラスが郡中総代となって、年貢米の江戸の輸送の監督、紛争の仲裁、法令の伝達など、まさに代官所の機能を代行するような中間支配機構の役割を果たしている。このように、江戸幕府の地方行政は、村側の協力によってはじめて推進することができたのである。

(LBa2_00017)

紙幅の都合もあり多くの例は挙げられないが、(12)のように、「このように」は前文脈の内容に応じて様々な述語が現れる。これは、(11a) に示したように、「このように」はあくまで前文脈の総括ないしその抽象化にとどまる内容を導く接続表現だからであると考えられる。

続いて、「このことから」の用例を挙げる。

- (13) a. 人間の男の胎児では、妊娠八週頃から精巣にアンドロゲンが分泌され始め、妊娠十六週を最高に妊娠二十六週くらいまで多量のアンドロゲンが分泌されていることが知られている（図3 - 十）。男の胎児は多量の“アンドロゲンのシャワー”を浴びることになる。一方、女の胎児ではアンドロゲンがほとんど分泌されない。このことから、胎児期に浴びるアンドロゲンが脳を「男の脳」にすることは十分考えられる。

(LBm5_00028)

- b. 人や肉食の動物は、ほかの動物を食べます。また、人や草食の動物は、植物を食べます。動物の食べ物のもとをたどっていくと、すべて植物にいきつきます。このことから、すべての動物の食べ物のもととは植物であり、植物が動物の養分をつくり出しているといえます。

(OT21_00003)

- c. 輸出入単価の比率を見ることの意味は、単に輸出単価の動向だけを見るのではなく輸入単価に対する比率を見ることによって、国際市況の影響をある程度排除することができると同時に、他国製品に対する我が国製品の非価格競争力や質的な優位性を推測することができると考えられるためである。その結果、テレビ、ラジオ、綿織物といった比較優位を失いつつあると言われる商品についても、輸出入単価比は高い値を示すことが分かった（第1 - 2 - 五十六図）。このことから、我が国企業が、これらの品目において量産品では優位性を失いながらも、輸出をより高品位・高機能製品へシフトすることによってその競争力を維持していると見ることが可能である。

(OW4X_00117)

表2についての説明でも述べたように、「このことから」と共起する述語には「考える」、「言える」などが多く、明らかに語彙的な傾向性が読み取れる。また、「見る」のように語彙的には知覚を表すと考えられる述語も、(13c)のように「推測する」といった意味合いで使用されることがあり、思考や判断と

いった意味との結びつきが認められる。このような事実は、(11b) に示した本稿の分析を支持するものであると言えるだろう。

ここまでの内容をまとめると、以下のようになる。「このように」はあくまでも前文脈の帰納的な抽象化（俵山（2007: 219）の言う「再提示」に相当）に主眼があるため、前文脈の内容に依存して後文脈が種々の述語をとる一方、前文脈を前提とした推論を展開することはできない¹⁶。それに対し、「このことから」は前文脈を前提として判断、推論を展開する（俵山（2007: 220）の言う「書き手の判断提示」に相当）ことを主な機能とするため、主節述語には判断や推論と結びついたものが選ばれやすい。BCCWJにおける「このように」および「このことから」と共起する述語の分布は、このように、(11) の記述的一般化とも整合的な形で説明される。

4. 指導方法の提案

ここまでの分析を踏まえ、本節では、“まとめ”を表す接続表現に関する具体的な指導方法の提案を行う。高等教育機関等におけるレポート・論文作成を念頭に置いた作文指導においては、自らの主体的な考えを論理的に表現することが求められる。従って、作文指導にあたって“まとめ”の接続表現を扱う場合には、「このことから」のような書き手の判断を導く機能を持つ接続表現は、取り上げる表現項目としても重要であると考ええる。

3節の議論を簡略化して述べれば、同じく“まとめ”を表す接続表現であっても、「このように」は「具体的事例に続けて筆者の意見を述べることができない」のに対して、「このことから」ではそれが可能であるということになる。そこで、本研究では“まとめ”を表す接続表現について、以下のように指導することを提案する。

- (14) “まとめ”を表す接続表現について、先行する具体的事例を単に抽象化して述べる場合には「このように（以上のように）」を使い、具体的事例を根拠とした書き手の主張を述べる場合には「このことから（以上のことから）」を使う。

¹⁶ ただし、前文脈において判断や推論が述べられている(6)のような場合には、後文脈にもそのような要素が現れることができる。この点は、(11) に示した本稿における分析と矛盾しない。

既に述べたように、“まとめ”という従来の用語のみでは後文脈の制約を十分に説明することができず、実際の指導においても困難が生じる可能性がある。“まとめ”を表す接続表現として「このように」と「このことから」を並行的に扱い、その違いを説明しながら作文指導に導入することで、学習者が“まとめ”という言葉によって混乱する状況（すなわち、(5b) や (7a) のような文を産出する状況）を減らすことができるのではないかと期待される。

5. おわりに

本研究の主張は以下のようにまとめられる。

- i. “まとめ”を表す接続表現のうち、「このように」は、前文脈を根拠とした書き手の判断を述べることができないのに対し、「このことから」ではそれが可能である。
- ii. 「このように」を国語教育において導入する際は、「このことから」との差異に注意し、前者が前文脈の抽象化のみを行うのに対し、後者は前文脈を根拠にした書き手の判断を述べる事が可能であると説明する。

従来、“まとめ”を表す接続表現として主にとりあげられてきたのは「このように／以上のように／要するに」といった、「前文脈を根拠とした書き手の判断を述べることができないタイプ」であり¹⁷、それ以外のタイプが表す“まとめ”の性質の記述は、十分に明らかにされていない。接続表現は日本語表現法を扱ったテキストにおいても関心が高く、国語教育への応用を念頭に置いた分析により、作文指導等に有益な観点が得られる可能性がある。今後は“まとめ”を表す接続表現について体系的な記述を進める必要があるほか、本稿が行った提案の効果測定なども実施する必要があるが、いずれも機会を改めて論じたい。

参考文献

- 石黒圭 (2008) 『語彙力を鍛える 量と質を高めるトレーニング』 光文社新書。
 石黒圭 (2016) 『「接続詞」の技術』 実務教育出版。

¹⁷ 管見の限り「このことから／以上のことから」を接続表現として取り上げているテキストはなく、俵山 (2007) がごく簡単に触れている以外に、言語学的な考察もほとんどなされていない。

俵山雄司(2007)「『このように』の意味と用法—談話をまとめる機能に着目して—」『日本語文法』7-2、pp. 205-221.

日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法7』くろしお出版.

引用資料

安部朋世・福嶋健伸・橋本修(2010)『大学生のための日本語表現トレーニング ドリル編』三省堂.

佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄(2016)『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド—大学生・大学院生のための自己点検法29』

野矢茂樹(2017)『大人のための国語ゼミ』山川出版.

樋口裕一(2016)『文型を使えば、短くわかりやすく迷わず書ける!「伝わる文章力」がつく本』大和書房.

調査資料

コーパス検索アプリケーション「中納言」(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(通常版) ver.2.4) (<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)

(みよし のぶよし・実践女子大学助教)